

モデル事業名	人がいつまでも創造性を持って「まち遊び」できる地域づくり
活動団体名	NPO 法人 五ヶ瀬川流域ネットワーク
ホームページ	http://www.gokasegawa.com
所属/ 担当者名	担当者氏名 土井 裕子
連絡先	電話番号：0982-42-3005 Eメールアドレス addoi@bronze.ocn.ne.jp
活動地域	延岡市東海東地区（栗野名町、大武町、牧町、柚木田町、無鹿町1区、2区、二つ島町（寺島、恋島））

● 活動地域の概要

この地域は、かつて延岡の舟運基地として栄えたエリアで、千石船を持っていた家や造り酒屋、遊郭などもあった。このエリアの人口、世帯数、高齢化率は、平成20年4月1日現在で人口4,958人、2,091世帯で集落毎には、

- ・ 栗野名町 830名 348世帯 22.3% ・ 大武町 1,100名 479世帯 19.8% ・ 牧町 509名 187世帯 16.9%
- ・ 柚木田町 944名 370世帯 18.1% ・ 無鹿1区 602名 327世帯 31.9% ・ 無鹿2区 666名 262世帯 28.5%
- ・ 二つ島町 307名 118世帯 27.4%である。土地利用の特性として周辺部に昔の街型を残す迷路のような集落があり、中心部に区画整理された、田圃が広がっている。洪水常習地帯なので、宅地や畑は嵩上げされ、美しい石積みがたくさん残っている。集落は区画整理されていないので、巨木や舟運基地の名残として、水神さんと庚申塔がたくさん残っている。

[位置図]



広い田圃の周辺に嵩上げされた宅地

● 活動地域の課題

100年前には延岡市の玄関として賑わった地域なのに、だんだんと寂れて、地域の誇りが伝えられていない。かつては共同で行われ、コミュニティーの絆を確かめる場であった「田植え」、「稲刈り」、「井で干し」、「祭り」などの共同作業も、2種兼業農家が主流となり機械で独自に行われたり、「井で」はコンクリート三面張りになってしまった。また、ベッドタウンとなるには、農振地域の指定もあり、宅地化が面倒なエリアも多く、かろうじて米だけを仕事の合間に作っている農家がほとんどである。子供が少なくなった事で、子供会が成り立たなくなったり、お祭りの参加者も少なくなって、地域のコミュニティーも魅力を無くしてきている。集落の形態は、昔ながらの「人が集まって暮らす場所」はよそ者にわかりにくいよう、わざと迷路のような道型に作るという形を継承しているが、そのおもしろさが地域に理解されていない。

● 活動の内容

(全体)

新たなコミュニティーの再生のため、遊びと仕事の中間のようなまち作りの仕組みを作ろうと「東海さるく」という地域を自転車で回って楽しむスタンプラリーを中心としたイベントを開催。地元のメンバーを中心とした実行委員会を組織し、地域の魅力を再認識する機会を作ると同時に、地域の手業や菜園の産品・手作り品を販売する「街角工房」、「街角ショップ」、「街角カフェ」などを開催している。また地域に新たな魅力をつけるために6年前から「アーティスト・イン・レジデンス」を継続している。これらの準備の中で、地域を飾るためのバナーや、鉄板の錆で染めたフラッグ、縄で編んだハンギングプランター、儂雲と呼んでいる雲の形の看板などをみんなで制作し、スタンプポイントの周りを飾っている。地域との交流の中で、アーティストが絶賛する日本人の人柄の良さや町の清潔さなども認識されてきた。地域紹介のガイドブックでは、地域の中で時間を掛けて育ててきた生け垣や巨木、道路と宅地をやわらかく繋ぐ何気ない景色の魅力なども盛り込んで、田舎の風景を魅力的に構成している要素についても解説した。

(直近1年館の進捗など)

一昨年からスタートした、このイベント時に、冬何も植えられていない田圃に菜の花を植えるという企画は、昨年は種の完熟が田植えに間に合わず、16kgしか菜種が取れなかったが、苗植えを1ヶ月早め、地域の小学校と連携することで、さらに植栽面積を広げている。今年のアーティスト、ミシェル・コンは3つ繋げたバルーンを20艇のカヌーにのせて海から運び友内川遊歩道のデッキに止めるという作品で川の魅力を表現してくれた。

● 活動の成果

・全体

回を重ねる毎に、色々な立場の方が関わってくれるようになって来ました。街角カフェや街角ショップもメニューが増えて、改めて農家の人々が身につけている生活技術の豊かさにも感服します。参加者は今まで、この狭い地域の中での行き来もほとんど無かったのに、これを機に互いの地域のおもしろさに気づき交流も生まれてきた。

また県外からの参加者がこの地域をおもしろがってくれることで、地域を見直し少し自信も持ちはじめています。

さらに、菜の花栽培によるエコエネルギー基地作りに取り組み始めた事は、地域に新たな連帯を産もうとしている。これは単純に田圃から食料とエネルギーが作れば、どんな時代が来ても生きていける地域が作れるという発想であったが、かつての暮らしに必要な物は自らの手で作るという生活から遠ざかっていたことと、その技術を持っている人々が、その技術を私たちに教え、伝えていこうという気持ちを持って協力してくれている。



シーチェ作品とお茶会

菜の花植え



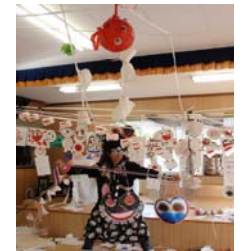
縄鉢作り



スタンプラリー



寺島公民館の蛙王



・ 直近1年間の成果など

22年度は東海東小学校と連携して、菜の花の苗を植える田圃を3haに拡大した。昨年から名称を変えた「絵小町東海さるく」は、地域での取り組みもより多くの参加者を巻き込んだ物となった。アーティスト・インレジデンスではニューヨークから来たミシェル・コンが、3つ繋いだ90cmの銀色のバルーンを20艇のカヌーで海から運んで遊歩道のデッキに止めるという作品を作り、バルーンに周りの景色も映ってとてもきれいな作品だった。

● 今後の課題及び展望

・課題

この地域の冬場は全く使われていない120haを超える田圃がに菜の花を植えるプロジェクトを実施しようと考えたのは、この地の生産組合長全員が退職後の厚生年金をつぎ込んで趣味的に農業をしていることと、全員に跡継ぎがないことで、今この地域に何らかの手立てをしないと10年後には荒れた120haの原野が広がってしまう。この地域で若者が何らかの産業を興したり、農業に魅力を感じるような仕掛けをみんなで作っていく必要があると思っている。

・展望（今後の取り組みや検討について記入）

エコ・エネルギーを採算に乗せるのは、現時点では難しい。ただ、景観作物としての菜の花の魅力は捨てがたい物があるし、地域のお年寄りにはとても喜んでもらった。菜の花栽培の経験を持つ方々も熱心に協力してくれている。今年度は細かなデータを取って、このプロジェクトを延岡市全体に広げることで、鉄鋼団地などと協力し合って、種を地元で絞って製品化する所まで持って行きたいと思っている。

アーティスト・イン・レジデンスで、アーティストに一番評判が良いのは、この地域の人の人柄。「日本人がこんなに穏やかで、優しい民族とは思わなかった。村の中も掃き清められてどこまでも美しい。」これが滞在したアーティストが必ず言う言葉である。これは観光地としては最も大事な宝である。新年度は、観光協会とも連携して、ヨーロッパのような、田舎の暮らしの場がそのまま観光地であるような仕組みを作ることを考えて見ようと思っている。

